

ビルマの壁画(Ⅱ)

——パガン時代を中心として——

大 野 徹*

Wall Paintings of Burma in the Pagan Period (continued)

by

Toru OHNO

ま え が き

ビルマの壁画については『東南アジア研究』11巻3号誌上でその一端を紹介したが、最も豊富な壁画を内蔵していると考えられるパガンの寺院群だけでも、その調査はまだ決して十分とは言えないのが現状である。荻原弘明教授を隊長とする鹿児島大学のビルマ学術調査隊は、1972年末から73年初頭にかけて行なった予備調査に引き続き、1973年11月から5か月間文部省の科学研究費交付を得て本調査を実施した。調査の主眼は貝葉(Peza)と折り畳み写本(Parabaik)とから成るビルマ語古文書の内容調査とマイクロフィルムによるその撮影収集とにおかれたが、壁画の調査撮影も並行して行なわれた。本稿はその調査結果の一部を整理したもので、11巻3号所収の「ビルマの壁画」を補うものである。

壁画の所在地点とその内容

1. アローピェ(Alopye Gu) 寺院

ニャウンウー町からパガン村へ向かう自動車道路をウェッチーイン村で南へ曲がり約1キロばかり行くと、ニャウンウーとパガンを結ぶ牛車道(旧道)に出る。この牛車道の西側、釉をかけたレンガ造りの仏塔として名高いスィン・パトーの東に隣接した中型のモン式寺院がアローピェである。ティーローミンロー寺院の屋上から見ると南東400メートルの地点に位置している。上部に螺旋状のシカーラを載せている。東に面した入口を入ると、内部は外陣(方形の前室)と内陣(方形の祠堂)とに分かれており、内陣の中央には東西南北の4カ所に仏像を安

* 大阪外国語大学ビルマ語学科

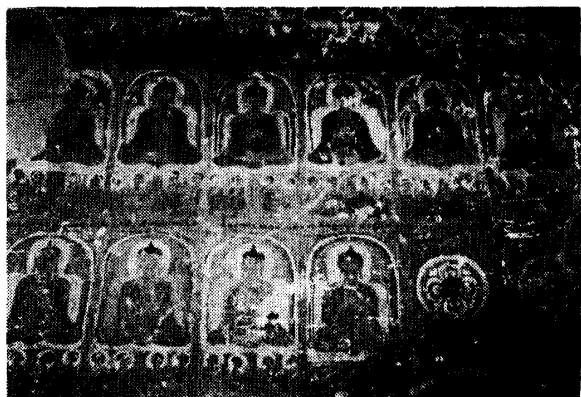


写真1 アローピエ寺院の仏坐像

道の内外両壁面だけである。画題は説法印を結んだ通肩姿の仏坐像群、すなわち過去28仏(写真1)で、上下八層にわたって描かれている。各層の仏像の下には合掌した4人の羅漢(剃髪した出家像)が描かれ、さらにその下には古代モン語による墨文の説明が見られる。仏像はいずれも丸顔で、耳朶が肩近くまで垂下し、一重瞼でやや釣り上がり気味の眼と細い眉、左右尻上がりの唇などを特徴としている。肉髻は屹立型、頭部は螺髪になっている。仏像背後の模様を一体ずつ変えることによって悟りを開いた樹を区別している。

外陣と内陣の境界通路(切り上げ)の左壁面と繞道西外壁の窓横面とには、宝冠を被り首飾りや衣装を身にまとった菩薩像(写真2)が描かれている。切れ長でやや釣り上がり気味の鋭い眼、細い眉は、パヤー・トンズー寺院やパヤー・ンガーズー寺院内の人物像を想起せしめる。墨文には小暦556年(1194 AD)の年号が記されており、この壁画が12世紀末に描かれたことを示している。

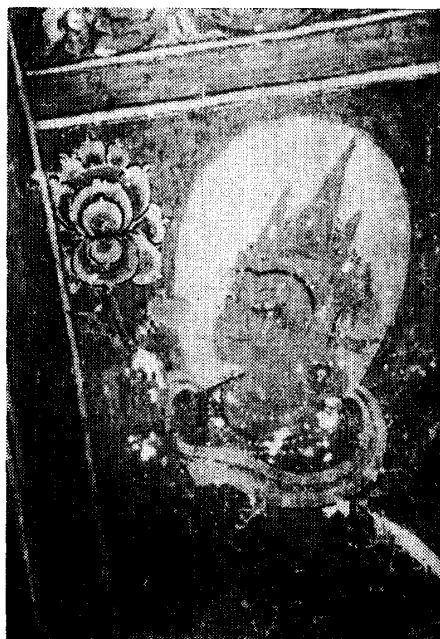


写真2 アローピエ寺院の菩薩像

2. 233号 (Gu No. 233) 寺院

スィン・パトーの西に隣接した小型寺院。崩れかかった螺旋状のシカーラを載せている。寺院自体が小型であるため内外陣の区別はない。この壁面には、床に接した箇所から天井際に至るまで上下40列にわたってびっしりと千体仏(写真3)が描かれている。すべて説法印を結んだ通肩の坐像である。その上層にはやや大きめの過去28仏の像が一行描かれている。正面奥に安置されていた仏像は崩れて残っていないが、その周囲に描かれている菩提樹の枝には頭に冠を戴き背中の中を折り畳んで両手で合掌した緊那羅の大きな像がみられる。また千体仏に

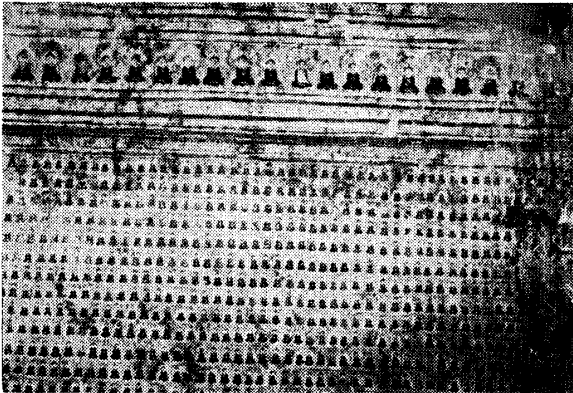


写真3 233号寺院の千体仏

囲まれた壁面の中央には、左手を胸の前に挙げ結跏趺坐した膝の上に右手を置いた大きな菩薩の姿も描かれている。菩薩の顔容は頭の中央部が剥落しているためはっきりしないが、両耳が長く頭上には宝冠を戴いている。

3. アーナンダ (Ananda Paya) 寺院

パガンにある巨大寺院の一つ。チャンスイッター王によって1091年に建立されたと言われる。上部に四面体のシカーラがあり、さら

にその上に尖塔を戴いている。地上の周囲に一層（マウラの攻撃と釈尊像の礼拝図）、基壇の上部に五層（第一層の南西隅から右まわりの順で始まり第五層のウェッサンダヤー本生譚で終わる本生譚）がそれぞれ浮き彫りにされている。東西南北に設けられた入口を入ると長い廊下を通して繞道に達する。繞道は二重になっており、内側繞道の東西南北に一体ずつ巨大な立像が安置されている。これは北から右まわりの順に、拘樓孫仏、拘那含仏、迦葉仏、釈迦牟尼仏だと言われている。

建立当初はこの寺院の壁面にも無数の仏伝、本生譚が描かれていたらしいが、現在は寺院全体が石灰で真白に塗り飾られていて壁画の存在を示すものは何も残っていない。数年前、考古局が中心になって壁面の一部を薬液で洗浄したところ、不鮮明ながら壁画が浮かび出てきた。結跏趺坐した説法印の28仏と合掌した4人の羅漢像（東入口の柱壁）および本生譚の一場面（北入口の柱壁）である。28仏と羅漢の画は、アローピエ寺院の壁画と同じ構図である。本生譚の人物群は、パトウダーチャー寺院と共通した特徴をもっている。

4. ヌワーピャ (Nwa Pya Gu) 寺院

パガンの南城壁を出てミンガバー村へ向かう道路の東側、ニャウンウーからパガンへと通じる牛車道とこの道路との交差点のすぐ東北の畑の中にある基壇二層の中型寺院である。上部に四面体のシカーラを載せている。東に面した入口を入ると、壁面に説法印を結んだ通肩の坐像がみられる。過去28仏である。各仏の足下には4人ずつの合掌した羅漢像が描かれている。アローピエ寺院の壁画と同じ構図である。28仏群の上層に描かれている装飾文様（蓮の葉や蕾を象ったもの）は、形状、色彩ともにまだきわめて鮮明である。

5. タワ (Tawa Gu) 寺院

ヌワーピャ寺院の東約100メートルの地点にある西向き的小寺院。上部には段状になった四面体シカーラを載せている。ここでは、内部の天井に無数の円を互い違いに重ね合わせた装飾文様がみられる。壁面に参詣客の記念の落書きがいっぱい見られるが、これはタワ姫の悲恋物

語に因むものであろう。

6. ミンピャ (Myin Pya Gu) 寺院

タワ寺院の真東、シツミェンナー・パゴダの南東、パトウダーミャー寺院からは真南400メートルの地点にある大型寺院。ソールー王の建立と言われている。方型の大きな基壇の上に螺旋状の仏塔を載いている。西に面した入口を入るとロの字型に繞道が設けられており、東西南北の内側に仏像を安置する場所が1カ所ずつある。

壁画は繞道の内外両壁面に描かれている。外壁の画は本生譚で、上下三層に498パネルある。各図の下には、モン語墨文の説明がみられる。内壁の画は釈尊像と二大弟子との組合せ、および支提と花模様との連続画である。処々に、両手に花をもち頭に冠を被った飛翔天 (Apsara) の姿が描かれている。釈尊像は通肩または偏袒右肩の坐像で、丸顔をしており、耳朵が長く、肉髻は屹立している。その左右で仏に向かって合掌している弟子二人は、舍利弗と目犍連であろう。壁面の保存状態は、入口を入れて左側（西側繞道）の内外壁と北側繞道の内壁とが良い。色彩的には黄と赤が鮮明である。

7. スィンピャ (Hsin Pya Gu) 寺院

ミンピャ寺院からニャウンウー・パガン間の牛車道（旧道）を東に行くと、道の南側に四つの寺院が南北に並んでいる。螺旋状のシカーラをもつ最北端の寺院（792号寺院）の南に隣接した入口西向きの中型寺院が、スィンピャ寺院である。内部は外陣と内陣とに分かれ、内陣の屋上に四面体のシカーラを載せている。

入口を入れて直ぐ右の壁面（外陣の南壁）に、左手与願の印、右手触地印の釈尊成道像が四層に描かれ、その横には象や馬を引き連れた軍人や烏帽子状の帽子を被り長袖の上衣を着た貴族、あるいは女性の合掌した姿などが描かれている。男女とも全員地上にひざまづいている。もっともこれらの人物群像は、パトウダーミャー寺院やミンカパー・クーピャウヂー寺院の壁画にみられる人物群像とは衣装の面でも顔の特徴においても異なっており、明らかに後世の画であることを示している。釈尊像にしても、眼が大きかったり、眉間に白毫があったりで、パガン時代の釈尊像とは相好を異にする。おそらくインワ（ニャウンヤン）時代か、コンバウン時代初期の画であろう。

8. 788号 (Gu No. 788) 寺院

スィンピャ寺院の南、ペーナター寺院の東約100メートルの地点にある西向きの小寺院である。壁面は三層になっており、上層に28仏、中層に天人像、その下層には横向きの羅漢像が描かれている（写真4）。28仏はすべて袈裟を通肩にまとい、結跏趺坐して両手で説法印を結んでいる。頭部は螺髪で、肉髻が屹立している。耳朵は長く垂下しているが肩には触れていない。仏像の左右には一人ずつ、白色の衣をまとい合掌した弟子の姿がみられる。その下の層は



写真4 788号寺院の28仏、天人像と羅漢像

梵天や帝釈天の像である。左足を膝のところで内側に曲げ、右足は後方に蹴り上げた形をしている。両腕は左右に広げ、肘から先を上にあげて掌を上向けに開き、右に法羅貝、左に蓮華を載せている。体つき全体がしなやかで、ふくよかな顔は女性を思わせる。しかし顔が三面描かれているところから判断すると、これは明らかに梵天像である。その下層の羅漢像は、丸顔だが上瞼がやや垂れ下がって鋭い眼つきをしている。羅漢像はすべて頭を剃髪し、袈裟を通肩にまとっている。なお入口北側の壁面には、ミンカバー・クーピャウザー寺院の人物像と同じ男性像、すなわち丸顔で、顎鬚、口髭を生やした王族の姿が数人分描かれている。

9. 番号不詳の小寺院 (Gu No. Unknown)

788号寺院の南東、 スィンピャ寺院横の道を南に向かって進むと東側の畑の中にある。ローカティパン寺院とその南のシュエサンドー・パゴダを底辺として三角形を形作れば、その頂点にあたる地点にある。崩壊寸前の小寺だが、上部には角型のシカーラを載せている。西に面した入口を入ると、仏龕周囲の壁面に釈迦八相図が四面描かれている。壁面の破損、剥落の度合いがひどいので内容ははっきりしないが、一面は左右に仏弟子を従えた説法印の釈尊坐像であり、もう一面は袈裟を偏袒右肩にまとい、右手を施無畏の印、左手は斜め下方に伸ばした立像である。ナーラーギリ象調伏の場面だと考えられる。その上方の壁面は大きく剥落しているが、入涅槃像だと推測される。その足元の人物像は、顎鬚、口髭を生やし、頭の後で鬘を結った男性像である。

10. クードーティッ (Kudawthit Gu) 寺院

ペーナター寺院の直ぐ北側に隣接する基壇二層の寺院で、東西に入口をもつ。壁面には28仏と本生譚とが描かれているが、破損の度合いが甚だしく鮮明さを欠く。その直ぐ北に隣接する小寺院（名称、番号共に不明）の内部にも、両横に夾侍を配した説法印の28仏坐像や蓮華状装飾、本生譚などが描かれている。こちらはやや鮮明である。

11. タヤンブー (Thayambu Gu) 寺院

ローカオウシャウン寺院の東約200メートル、 シュエサンドー・パゴダの南西、 スィンピャ寺院横の道を真直ぐに南下すると道の東側にある基壇一層の小寺院である。12世紀の建立て、上部に螺旋状のシカーラを載せている。

東に面した入口を入ると直ぐ横の両壁面に仏伝が、その奥の左右壁面には本生譚（写真5）

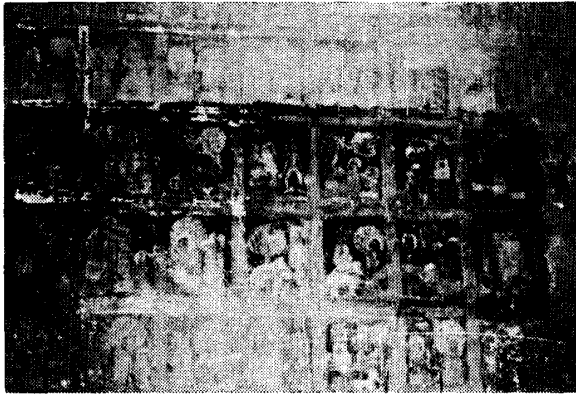


写真5 タンブー寺院の本生譚



写真6 タンブー寺院の菩薩立像

が、その上層には釈尊坐像が、天井には千体仏が描かれている。仏伝と本生図の下には、ビルマ語による墨文の説明がみられる。仏伝図の壁面は剝落摩損がひどい。仏像が安置されている正面奥の右横壁面（釈尊坐像の下層）には、ナンダミンニャ寺院やタンブーラ寺院、イッサゴーナ寺院などの壁面にみられるような黒色の冠（あるいは編み上げの髪？）を頭上に戴いた大きな菩薩立像が描かれている（写真6）。仏伝図の中で釈尊坐像に向かって合掌している天像（冠を被っている）や人物群像は、パトウダーチャー寺院やミンカバー・クーピャウダー寺院の群像と同じ特徴をもっている。釈尊像は丸顔で耳朶が長く、肉髻は屹立している。眼は上瞼の中央部が下がり半眼に近い。天井の千体仏はみな同じポーズ、すなわち通肩、説法印の坐像である。なおこの寺院には、アラーワカ羅刹の調伏場面も描かれており、説法印を結んだ釈尊坐像の傍に牙を生やした薬叉の姿がみられる。

12. 773号 (Gu No. 773) 寺院

パガンからミンカバー村へ向かう道路の東の畑の中、ミンガラゼーディーから見ると東北の位置にある。上部に四面体のシカーラを載せた小型の寺院で、入口は東向き、内陣外陣の区別はない。縦横整然と分けられた左右両壁面のパネルの中に本生譚が描かれている。汚損がひどく不鮮明である。墨文の説明はない。

13. ミンカバー・クーピャウンゲー (Myinkaba Kupyauk-nge Temple) 寺院

クーピャウダー寺院の東北約100メートルの地点にある中型寺院。東に面した入口を入ると内部は外陣と内陣の二室に分かれ、内陣には回廊が設けられている。内部の龕内には出胎、入涅槃などの石造彫刻がみられるが壁画は僅少で、確認できるのは右手触地印、左手与願印の降魔成道坐像や支提，大小無数の円を組み合わせた装飾文様だけである。前二者は初期のものではなく、後世の作品である可能性が強い。

14. 698号 (Gu No. 698) 寺院

クーピャウンゲー寺院の西にある小寺院。上部に螺旋状のシカーラを載せている。東西南北の四方に入口があるが、いずれも仏像安置用の窟にすぎず内部は繋がっていない。

壁画は窟ごとに異なる。第一は羅漢立像で、正面を向き、手に錫杖や鉢をもった出家姿である。変わっているのは両足の爪先で、踵をきちんとつけ爪先を180度を開いている。第二は、ウェッチーイン・クーピャウヂー寺院やコンドーヂー寺院などの天井にみられる四角と四円との組合せから成る花卉模様である。花卉相互間に組み込まれている菱型図形の中には、説法印の仏陀坐像が一体ずつ描かれている。第三は、仏像背後の壁面に描かれた支提とその左右の天人像である。天人像は共に右または左の足を内側に折り曲げ、もう一方の足を後方に跳ね上げている。両腕は腋から離し、肘から先を上挙げて掌に花を載せている。こうした状態は、ウェッチーイン・クーピャウヂー寺院やウィニードー寺院、テッチャムニ寺院、コンドーヂー寺院などの天人像に似ている。

15. 697号 (Gu No. 697) 寺院

698号寺院の南隣にある小寺院。上部に四面体のシカーラを載せている。北に面した入口を入ると内部は外陣と内陣とに分かれている。壁面には、仏像に向かって合掌礼拝した羅漢と在家信者の姿が描かれている。全身をすっぽり覆うゆったりしたガウン状の衣は、パトウダーミャー寺院やアベヤダナー寺院、ミンカバー・クーピャウヂー寺院などの人物像がまとっている衣装と同じである。天井には、八角形の図形が上下左右に整然と描かれ、その中にクローバー状の葉が4枚ずつ配置され、さらにその中央の円の中に通肩、説法印の釈尊坐像が描かれている。

16. ピャッサシュエグー (Pyatsa Shwe Gu) 寺院

チャンスイッター王の建立になる中型寺院の一つで、ミンカバー村の真西にある。上部に四面体のシカーラを載せている。東に面した入口を入ると手前が外陣、その奥が内陣になっている。内陣には中央部に仏像を安置する場所が4カ所あるが、仏像は4体とも崩壊して残っていない。

壁画は、外陣の両壁面と内陣繞道の外壁とにみられる。外陣の壁画は本生譚で、各画の下にはモン語墨文による説明がある。本生譚の層は少ない所で九層、多い所では十五層もある。壁面の保存状態はあまり良いとは言えない。当然、画もさほど鮮明ではない。内陣では南北西の各外側壁面に窓が三つずつ設けられ、窓と窓との間には龕が五つずつ作られている。この外壁面には、両横に夾侍を従えた偏袒右肩の釈尊坐像（降魔成道像）が描かれている。

17. 494号 (Gu No. 494) 寺院

ミンカバー村からティリピッサヤ村へ向かう自動車道路（舗装はされていない）の西側、ソ

ーミンデー僧院跡の直ぐ南に位置する小寺院である。角型シカーラを載せているが全体的に崩壊傾向にある。入口は北向き。内外陣の区別はない。天井に仏足跡が描かれている（写真7）。その周囲には円形（内側）と方形（外側）の枠があり、円形枠から方形枠の四隅に向かって支提が一基ずつ聳えるように描かれている。方形枠の外側には通肩姿の仏坐像が一辺に10体ずつ計40体描かれ、その外側にはさらに方形の枠が二層設けられている。その層の外側には一辺に五つずつ円が印され、各円の中に女人像や孔雀、鹿、馬、象、鳥などの動物およびそれらの背中にまたがった人物像などが描かれている。



写真7 494号寺院の仏足跡

18. 495号 (Gu No. 495) 寺院

494号寺院の東に隣接する入口北向きの小寺院。四面体のシカーラを載せている。内外陣の区別はない。壁画は、壁面の上層部にのみ見られる。正面の壁は上下二層に分かれ、上層に蓮の茎を象った装飾と各種の生物が描かれ、その下層には蓮の花と葉とを組み合わせた装飾文様が描かれている（写真8）。横の壁面も二層に分かれているが、下層に描かれているのは装飾文様ではなく、牙や歯をむき出しにした異様な顔の怪物 (Kirti Mukha) である。

19. 496号 (Gu No. 496) 寺院

495号寺院の南にある小寺院で、入口は北を向いている。上半分が崩れた螺旋状のシカーラを載せている。内部はローカテイパン寺院のように切り上げがなく、内外陣の区別がはっきりしない。壁画は豊富で鮮明である。前後左右の壁面には釈尊坐像と仏伝（写真9）、奥室左右壁の下層には冠を被り爪先を左右に開いた菩薩立像、上層には28仏、その上にはキールティ・

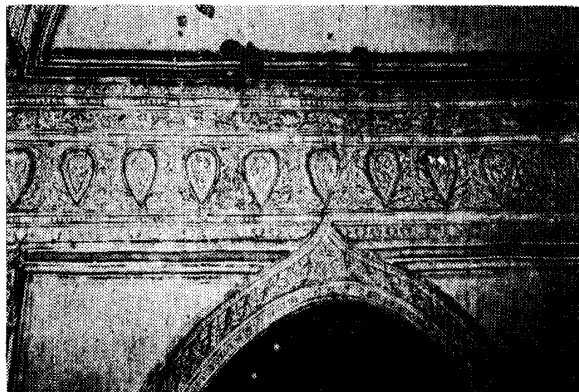


写真8 495号寺院の装飾文様



写真9 496号寺院の仏伝図

ムカ、そして天井には支提を背景とした説法印の釈尊坐像が、それぞれ描かれている。前室壁面の釈尊坐像の両横には、冠を被り釈尊に向かって合掌礼拝している天人と在家信者の姿が、上中下三層に分けて描かれている。仏伝の一つは降兜率図で、梵天、帝釈天に誘導されながら宝階を降下する偏袒右肩の釈尊立像が示されている。ミンカバー・クーピャウデー寺院祠堂の繞道内壁に描かれている宝階三道下洲と同じ構図である。なお祠堂左右の明り取り窓の周囲には、698号寺院と同じ天人像、すなわち冠を被って片足を折り曲げもう一方の足を後に跳ね上げて両掌に花を載せた姿が描かれている。

20. セインニェッ姉 (Seinnyet Ama Gu) 寺院

496号寺院の南東、ミンカバー村からティリピッサヤ村へ向かう自動車道路の東側、やや小高くなった所にある。どっしりした四面体のシカーラを載せた中型寺院である。東西南北に入口があるがそれは回廊に通じているだけで、外陣は東側の入口（セインニェッ姉パゴダに面したほう）にしかない。外陣の左右壁面には、上層に夾侍を伴った28仏、その下に本生図（南壁に始まり、北壁、東壁の順）が十層描かれている。壁面の剝落がひどいため画は不鮮明である。

21. 449号 (Gu No. 449) 寺院

セインニェッ姉寺院の南西、イラワジ川岸近くの丘の上にある小寺院。四面体のシカーラを載せている。入口は東向き、内外陣の区別はない。入口を入って直ぐの左右壁面には本生譚が、縦に十六層、横に十七列ずつ、合計544パネル描かれている(写真10)。その奥の壁面は仏伝



写真10 449号寺院の本生譚図

で、須弥山を中心に出胎、初転法輪、宝階三道下洲、ナーラーギリ象の調伏、入涅槃などの場面が描かれている。ここには、夾侍を左右に一人ずつ配したザブパティ宝冠仏の姿も描かれている。宝冠仏は頭に冠を被り正面を向いて結跏趺坐している。宝冠仏の周囲には合掌礼拝した8人の女性が描かれているが、これらの女人達の髪型や衣装が一人ずつ違うのは当時の風俗を反映した結果だと解釈される。本生譚の上層には円があり、その中には

正面を向いて結跏趺坐し両手を胸の前で合わせた Kyak Śri の姿が描かれている。なお仏像が安置されていた祠堂奥の右壁には、通肩姿の千体仏が描かれている。

22. ティンガヤーザー (Thinga Yaza Paya) 寺院

449号寺院の200メートルほど南、ティリピッサヤ村の北約300メートルの地点にある小型の寺院で、上に四面体のシカーラを載せている。入口は北向き。内外陣の区別はない。この壁

画はきわめて鮮明である。画題は本生譚と釈迦八相図で、本生譚はアパンナカ本生話からウェッサンタラー本生話に至る 547 の物語が左右両壁面に縦十八層、横十七列にわたって一図一景ずつ描かれている（写真11）。仏伝は出胎、初転法輪、入涅槃などの釈迦八相図で、左壁面に 3 枚、右壁面に 4 枚、計 7 枚描かれている。



写真11 ティンガヤーザー寺院の本生譚図と仏伝図

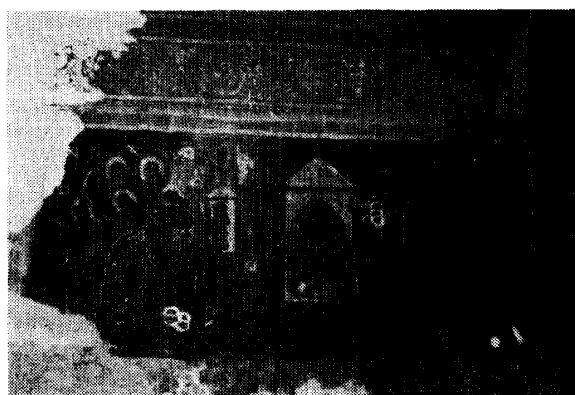


写真12 418号寺院の本生譚の一場面

23. 418号 (Gu No. 418) 寺院

ティリピッサヤ村からチャウ町へ向かう自動車道路（未舗装）を南下すると、乾季には水が涸れ上がって砂ばかりになる河がある。その河を渡って直ぐ西側に、角型のシカーラを載せた東入口の小型寺院がある。これが418号寺院である。小型ながらも内部は外陣と内陣とに分かれている。壁画は外陣上層（仏伝、支提など）と切り上げ左右の壁面（本生譚：下にモン語墨文の説明がある）（写真12）および内陣の上層（28仏）などである。壁画の人物の顔容、容姿、服装などは、アベヤダナー、ナガヨン、ローカティパン、ミンカバー・クーピャウヂー諸寺院の人物図に類似している。

24. 480号 (Gu No. 480) 寺院

ミンナントゥー村北部、パヤートンズー寺院の東約30メートルの畑の中にある小寺院。シカーラはない。北入口。他の寺院と違ってここには仏像がない。その代り正面奥の壁面に大きな降魔成道像が描かれている（写真13）。袈裟を偏袒右肩にまとい、両足裏を上向けに結跏趺坐し、右手触地印、左手与願印に結んだ姿はほかの寺院の成道像と変わらないが、体全体にふっくらと丸味があり幾分女性的な印象を与える。眼は半眼で鋭い。釈尊像の上層、蓮の葉を象った装飾文様の層を隔てて天井



写真13 480号寺院の降魔成道像

に、説法印、通肩の仏坐像が上下五層にわたって描かれている。各層の両端には、地上にひざまづき仏像に向かって合掌した天人（冠を被り半パンツ状の腰布をつけている）の姿が一体ずつみられる。東壁面の隅近くには、釈迦八相図が片方に四面ずつ描かれている。

25. アソーチュン (Asawkyun Gu) 寺院

パヤートンズー寺院の南東約150メートルの地点にある東向きの寺院で、内部にビルマ語の石碑を数点収蔵している。壁面には、698号寺院や496号寺院の天人像と同じ姿態の飛翔天の姿がみられる。

26. サレー近辺在寺院の壁画

パガン時代の壁画は、パガン地方にのみ残存しているのではない。石油の産地チャウ町の南にあるサレー (Sale) 町 およびその南のイエーレー (Yele) 村、ニーズ (Nyizu) 村などの寺院の内部にもまだ相当残っている。サレー町では寺院番号1, 2, 10, 19, 40, 41, 45など、ニーズ、イエーレー両村では寺院番号56, 59, 60, 61, 66, 67, 69, 77, 83, 92, 94などが壁画を内蔵している。これらの寺院はいずれも小寺院で、上部に四面体のシカーラを載せ、パガンのモン式寺院と同じ格子状の窓を備えている。入口は東向きと北向きが多い。内外両陣の区別はない。

画題は、釈尊坐像、立像、過去28仏、仏伝（写真14）、本生譚（写真15）、仏足跡、菩薩立像（写真16）、坐像、合掌羅漢、天女、緊那羅、装飾文様（写真17）などで、パガンにある壁画と変わらない。描かれている位置も、入口を入って直ぐの左右壁面が本生譚、奥の壁面が仏伝、その上層は過去28仏、四隅菩薩立像、正面奥の仏像左右は合掌羅漢、緊那羅、天井は仏足跡と



写真14 69号寺院の仏伝図



写真15 92号寺院の本生譚図



写真16 60号寺院の菩薩立像



写真17 56号寺院の仏足跡と装飾文様

いうようにほぼ定まっている。王族の衣装も、パガン在寺院の壁画のそれと同じ形や図柄を示している。

27. ミングン在寺院の壁画

パガン時代に建立された寺院は、マグエー (Magwe) 市の南16マイルのイラワジ川左岸にあるミングン (Myingun) 地方にも、数基点在している。この内筆者が直接調査する機会を得たのは、川岸近くのミングン中学校の東にあるレーズーサンヤー (Lezu Sanya) 寺院だけである。この寺院は、四面体のシカーラを載せた小型寺院だが、内部は内陣と外陣とに分かれている。この壁画は、説法印を結んだ釈尊坐像を中心に、その左右に出家と在家信者の合掌礼拝図を配し、その右側に冠を被った菩薩立像が描かれている。その上層には、内側に過去28仏を配した円が並べられている（写真18）。過去仏はいずれも通肩、説法印の坐像である。背後に各仏がその下で悟りを開いた樹が描かれている。壁面の摩損、汚れなどのため画はあまり鮮明でない。釈尊の顔は丸顔で、肉髻は蓮蕾状になっている。眼は、パガンの壁画とは違って半眼ではない。眦がやや釣り上がり気味になった眼を見開いている。

ま と め

パガン時代の壁画に共通する特徴を整理してみると次のようになる。

- (1) 壁画の所在地は、大部分がニャウンー町ウェッチーイン村、タウンビー村、パガン村、ミンカバー村、ティリピッサヤ村、ミンナントゥー村など、い



写真18 レーズーサンヤー寺院の過去28仏

わゆるパガン地方に集中している。しかし、サレー町、ニーズ村、イエーレー村、マグエー市南のミンゲン村など、パガン以外の地にもまだ若干残っている。

- (2) 壁画の内容(画題)は、釈迦八相図を中心とする仏伝、過去28仏、本生譚などを基本とする。菩薩、緊那羅、天人、動物、怪物などが付随的に描かれていることもある。蓮の華、蕾、茎、葉、円などを組み合わせた装飾文様が豊富なことも、この時代の特徴の一つである。
- (3) 人物像には二種のタイプが見られる。一つは、パトウダーチャー、ローカテイパン、ミンカバー・クーピャウヂー、アバーヤダナー、ナガヨン、テインマズィー、ペーナターグー、タャンブーなどの寺院にみられる像で、丸顔、一重瞼、細い眉、大きな丸い耳環、男性の場合は口髭、顎髭、後に伸ばした髪などを特徴とする。もう一つは、パヤートンズー、ナンダミンニャ、タンブーラ、レーミェンナー、パヤーンガーズーなどの寺院にみられるもので、男女とも長い顔、鳥の嘴のように尖った鼻、突き出た顎、鋭い眼つき、体全体から見ると不釣り合いに大きな顔、しなやかな姿態などを特徴とする。大ざっぱに言うと、前者は11世紀から12世紀、後者は13世紀に描かれたものである。

参 考 文 献

- Aung Thaw, U. 1972. *Historical Sites in Burma*. Rangoon.
Bo Kay, U. 1971. *Pagan Shayhaung Thigaungzayamya* (in Burmese).
Luce, G. H. 1969. *Old Burma-Early Pagan*. vol. I, II, III.
Lu Pe Win, U. 1955. *Pictorial Guide to Pagan*. Rangoon.
Ministry of Union Culture. 1966. *Shayyoe Myanma Bagyi* (in Burmese).
Myin Aung, U. 1962. "Sale Takhwin Thudethana," *Yinkyahmu*. vol. III, no. 11 (in Burmese).
大野 徹. 1973. 「ビルマの壁画—パガン時代を中心として—」『東南アジア研究』11巻3号, pp. 360-381.